

相談支援つうしん

<第 58 号>2020 年 1 月 20 日
県立湘南養護学校 支援連携部
相談支援係 ~教師編~

～校内の風景～

指導のエビデンスを検証すること

小学部のある先生から、自己刺激に没頭しやすいクラスの児童らに対して、授業前に求めている感覚刺激を十分に入力してあげることで授業への参加状況の向上を図りたい、との相談がありました。感覚プロフィール（短縮版）の結果からも感覚統合の課題を抱えていることが推測されたので、実際にデータを取って成果が見られるか検証することになりました。

✓ 標的行動の同定

まず減らしたい児童の自己刺激行動を決めます。児童によっては複数の自己刺激行動があったり、その強弱があったりするので、明確にデータを取る標的となる行動を決めます。

✓ 介入方法の設定

今回の介入方法は作業療法士からのアドバイスを受け、児童が好きで楽しめるトランポリンで体を動かし、固有受容覚と前庭覚を十分に刺激することにしました。

✓ データ測定の方法の決定

測定しやすいことから、自己刺激行動の没頭時間を測定することにしました。ただし、自己刺激に没頭している時間をストップウォッチで計測するのではなく、インターバル記録法という測定方法を用いることにしました。具体的には、測定する時間を朝の会の開始から 5 分間とし、その 5 分間を 10 秒ごとのインターバルに区切りました（右下表）。そうすると、インターバルは全部で 30 区切り（横 6×縦 5 分）になります。1 つのインターバル中に、少しでも自己刺激行動が見られたら✓を入れます。

実際の計測では、ストップウォッチを回しっぱなしにして 10、20、30、…と経過する間に自己刺激が見られたかどうか観察します。例えば、30 秒をまたいで自己刺激が見られた場合は、右のように✓は 2 か所記入します。こうして計測したデータを割合で算出します（ $11 \div 30 \times 100 = 36.6\%$ ）。

表 インターバル記録表

分\秒	10	20	30	40	50	60
0	✓		✓	✓		
1				✓		
2			✓			
3		✓	✓		✓	✓
4	✓		✓			

5 分

✓ ベースラインのデータの測定

データの測定の仕方が決まったら、まずは何もしない自然な状態でどのくらいの自己刺激行動が生じているのかを測定します。

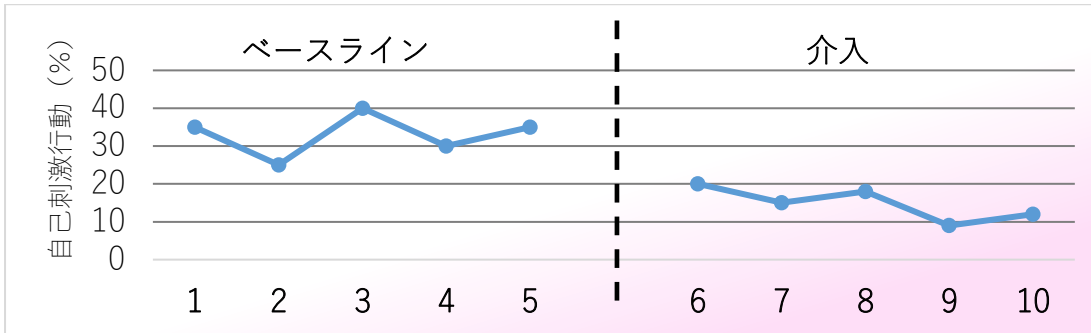
これがベースラインのデータとなり、介入を行ったときとどのくらい差が出るかを見る貴重なものです。そして、このデータは少なくとも 3 回連続で取らなければ傾向を見ることはできません。合わせて、データの傾向が安定しているのかも重要です。乱高下しているデータからは状態が上昇傾向なのか、減少傾向なのか、慢性傾向なのかが分かりません。そのため、乱高下していないことも確認します（確認

の仕方はここでは省略します)。

✓ 介入期のデータの測定

ベースラインのデータが取れたら、次は介入を行って同じようにデータを取ります。厳密なことを言うと、自己刺激行動を介入によって減らすことが目的なので、ベースラインのデータの傾向は安定傾向か上昇傾向であることが求められます。ベースラインデータが減少傾向の時に減少を目的とする介入を行うと、「それって介入しなくても自然に減少していたんじゃない？」と突っ込まれます。

こうして取ったデータをグラフ化してみます。



こうしてグラフ化してみると、ベースライン期(5日間)の平均が33%であるのに対し、介入期の平均が14%程度となっていることがわかります(※このデータは実際のものではありません)。こうして比較してみると差が出ていることが分かり、1つの根拠を示すことができました。実際には、同様のデータを3名の児童で取ってそれぞれグラフで表されていました。

✓ 結果と考察

実際の結果を見ると、確かに介入を行ったほうが自己刺激行動の減少が見られる児童もいました。しかし、明らかな差異が見られなかった児童もいました。考察ではその原因として、運動量の確保が十分でなかったことなどが挙げられていました。実態の異なる児童全員に対して安全性に配慮した上で、身体を十分に動かす時間を確保するのはなかなか難しかったという今後の課題が示されました。

～アセスメント結果を授業作りに活用すること～

今回取り上げた先生以外にも、感覚プロフィールの結果を活用して授業の中でさまざまな新規、あるいは苦手な感覚に無理なく慣れる活動を授業に取り入れている先生もいます。感覚は他者とは共有しにくいものである上に、情緒が安定しているときは受け入れられても、不安定なときには敏感になりやすくなるといった閾値(いきち)が変動する特徴があります。そのため、客観的な指標でさまざまな感覚の特徴を捉えておくことで子どもの反応を理解しやすくなり、特性に応じた手立てを講じやすくなります。



子どもの実態を自分の目で観察して把握することは大切ですが、自分の目だけに頼ると必ず見落としがあります。そのことを自覚する謙虚さを忘れず、自分の目で見て感じたことと検査等のアセスメント結果を照らし合わせて、子どもの実態をより正確に把握するよう努めることも必要です。観察とアセスメント結果が異なったときには、なぜそうした違いが出てしまったのかを考えることが、子どもの真の姿を理解することにつながります。